

五島列島枕島における漁業の変化過程

田 和 正 孝

- I はじめに
- II 地域の概観
 - 1. 位置および地形
 - 2. 集落構成と人口
 - 3. 生業
 - 4. 本窯, 伊福貴両集落の現況
- III 漁業の史的展開
 - 1. 近世期
 - 2. 明治・大正期
- IV 揚繰網の定着と繁栄
 - 1. 揚繰網の定着
 - 2. 漁業形態
 - 3. 島内の水産加工業
- V 揚繰網の衰退
 - 1. 衰退の原因
 - 2. 揚繰網衰退以降の展開
- VI 最近の漁業
 - 1. 本窯と伊福貴の漁業
 - 2. タイ一本釣漁業
 - 3. ハマチ養殖
- VII むすび

I はじめに

本稿は、長崎県五島列島^{かば}杵島を事例として、沿岸漁村における漁業の変化過程を主として経済地理学的視点にたって分析するものである。

漁村の地理学的研究は、研究する対象および地域の両面において多岐にわたっている。そこで、藪内芳彦は、早くも1950年代に、諸社会科学における漁村の地域的研究を検討したうえで、従来の地理学的研究を8個のタイプに分類し、個々の特色を抽出している。そして、結果として、地域の研究が諸社会科学の諸原理を援用しておこなわれ、それらを通じてより高い類型化ないしは法則定立へと接近することが望まれるとしている〔藪内、1957〕。ただし、類型化、法則化の基礎となるのは、地域のインテンシヴな研究の蓄積である〔大野、1960：p. 26〕。このようなインテンシヴな研究は現在でも一貫しておこなわれている⁽¹⁾。換言するならば、実態調査によるモノグラフが水産地理学に関する法則性を追求するために蓄積され続けているわけである。筆者は、本稿をこのような研究の一部を構成するものと考えている。

杵島では近世期以降、イワシ網漁業がさかんにおこなわれた。とくに、第二次世界大戦後には動力船揚繰網資本が集中し、杵島は五島でも最大級の揚繰網根拠地として繁栄した。しかし、揚繰網は、昭和30年代に入ると、主として資源が減少したことによって、杵島から全く姿を消してしまった。

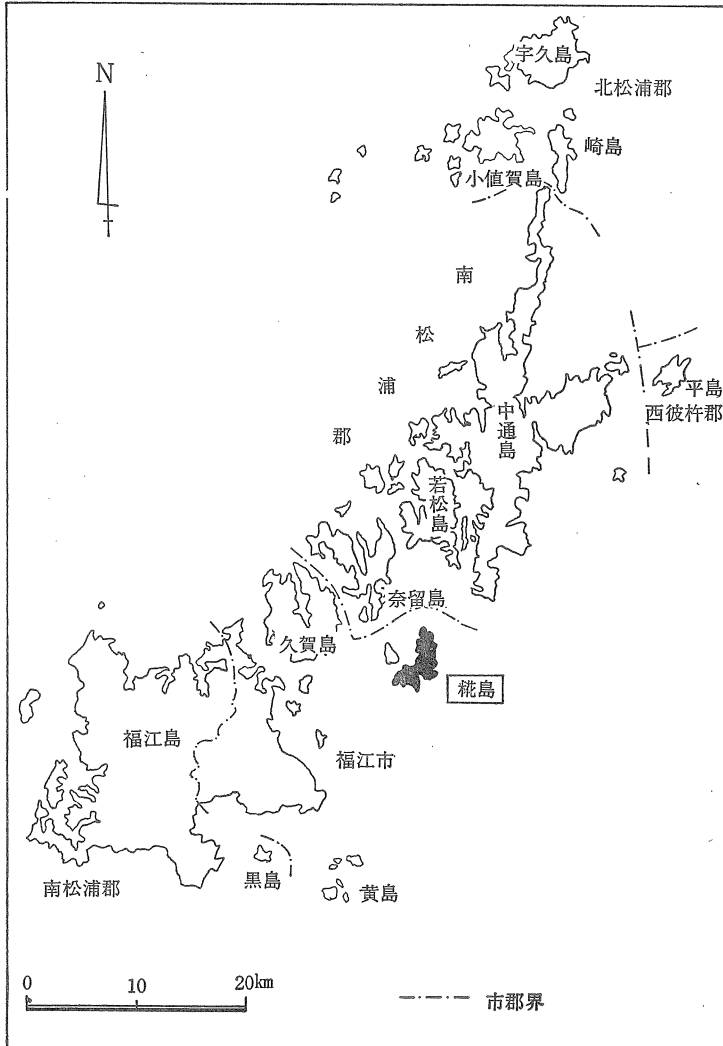
本稿では、以上のような漁業の変化を、揚繰網導入以前の時期、揚繰網繁栄時期、揚繰網衰退時期の3期にわけてのべ、その後、揚繰網衰退以後の漁業の新たな展開についてふれることにする。

II 地域の概観

1. 位置および地形

杵島は、下五島、福江島の北東約16kmの五島灘上に位置する小島である（第

1 図)。『長崎縣南松浦郡郷土地誌』には、杵島は、「樺島村の在る所にしてつぶら圖島・
な椎の木島等其の前に並び、東北中なかどおり通島の佐尾崎と相對し、西方五海里を隔てゝ奈

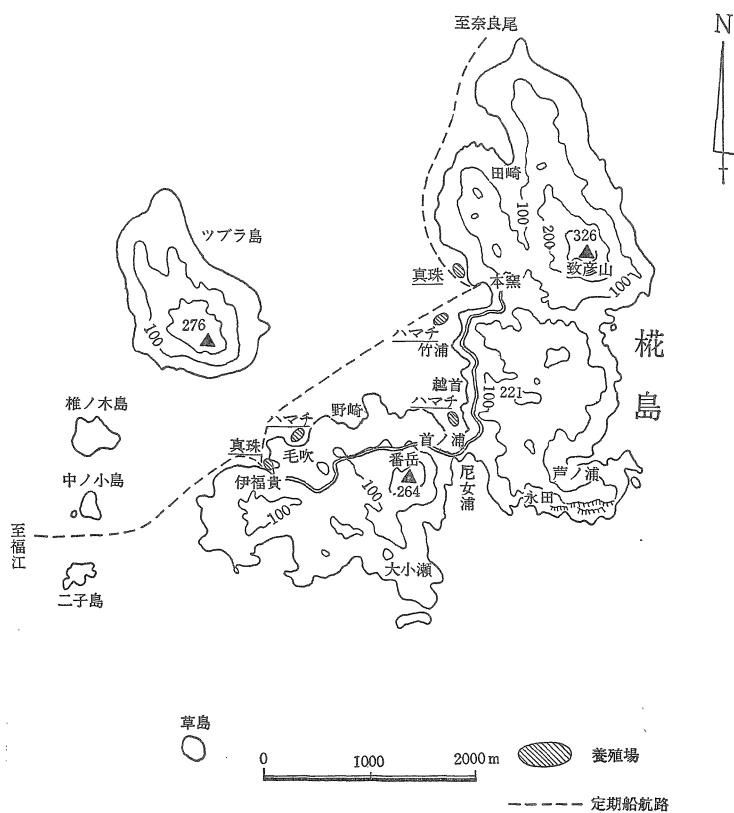


第1図 杵島位置図

留島・久賀島に面す。周囲凡そ十海里にして、其の中央部は海水深く入りて地頭ちけいをなす」というように記されている〔松野尾, 1913: p. 21〕。

杵島の面積は 10.410 km^2 である。付近には上述されている ツブラ島 (1.530 km^2)、椎ノ木島 (0.008 km^2) をはじめ、中ノ小島 (0.004 km^2)、二子島 (0.004 km^2)、草島 (0.003 km^2) といった無住の小島が存在している。これらをくわえると、面積は 11.960 km^2 となる。

第2図からもわかるように、海岸線は非常に屈曲している。これは断層によ



第2図 杵島概略図

って形成された原地畠が傾動の結果、北側で大きな浸蝕を受け、ついで沈降したことによるものである〔竹田, 1966: pp. 697-698〕。また、島は全般的に山がちで、平地は集落が形成されている部分にわずかにみられるにすぎない。

2. 集落構成と人口

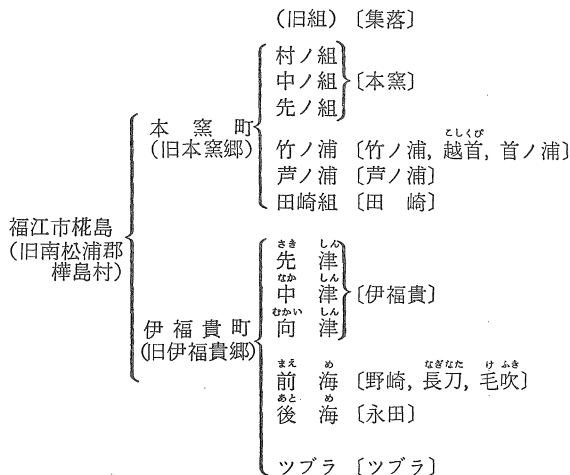
杵島は、行政的にみると、昭和32年(1957)まで南松浦郡樺島村を形成していた。それ以降は福江市に所属し現在にいたっている。

昭和52年(1977)6月現在の世帯数は276、人口は832人である(数値はいずれも福江市役所杵島支所調べ)。

杵島の集落構成を示したものが第1表である。島は、中央の地頸部分で本窯町^{もとがま}と伊福貴町^{いふくき}に区分される。これらは旧郷に相当する。その下に旧組(小字単位)が存在し、これらによって集落が構成されている。

かつて、本窯町の村ノ組、中ノ組、先ノ組、伊福貴町の先津^{さきしん}、中津^{なかしん}、向津^{むかいしん}、向津^{むかいしん}は地下

第1表 杵島における集落構成



注) 竹田は旧組のうち竹ノ浦を前海組^{まへのめ}、芦ノ浦を後海組^{うしろめ}、前海を前目組、後海を後目組としている〔竹田, 1966〕。

部落とよばれ、残りは点在部落とよばれていた。地下部落は、五島藩々政期にいわゆる本百姓層によって形成されたところである。これに対して点在部落は〈ヒラキ〉ともよばれ、大村その他の藩から宗教上の理由で迫害され、強制的に移住させられた人々や、信仰の自由を求めてこの島に漂着した人々が住みついたところといわれている。

以上の2部落とは成立過程の異なるものとしてツブラがあった。これは、明治初年(1868)頃に初めて入植がおこなわれたツブラ島の集落をさす。ツブラ島は、第二次世界大戦中爆発事故によって、一時無人島に帰した。しかし、その後、奈留島や福江島の人々が入植して、再び有人島となった。この時期は、後述するように、杵島において揚繰網漁業が繁栄した頃と一致しており、入植は漁業に関連したものであったと考えられる。その後、揚繰網が衰退しはじめる昭和30年代前半には、

第2表 旧組ごとの人口および世帯数の変化

町名	旧組名	昭和24年(1949)		昭和38年(1963)		昭和50年(1975)	
		世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
本 窯	先ノ組	62 (戸)	264 (人)	37 (戸)	142 (人)	31 (戸)	83 (人)
	中ノ組	80	397	52	206	40	90
	村ノ組	42	178	28	113	18	43
	竹ノ浦	44	189	25	136	16	57
	芦ノ浦	45	250	47	223	17	61
	田崎	30	125	14	79	0	0
	計	303	1,385	203	899	122	334
伊 福 貴	先津	90	422	57	286	49	144
	中津	90	375	69	301	46	140
	向津	78	404	70	335	46	132
	前海	68	335	37	169	12	42
	後海	55	267	32	146	20	52
	ツブラ	14	118	0	0	0	0
	計	394	1,921	265	1,237	173	510
合	計	697	3,306	468	2,136	295	844

注) 昭和24年の数値は〔竹田, 1966〕による。昭和38, 50年の数値は福江市役所杵島支所資料による。

島民は全員島からひきあげ、ツブラ島は三たび無住の島となっている。

旧組ごと世帯数および人口の変化を示したものが第2表である。昭和50年(1975)の世帯数、人口は、各組とも昭和24年(1949)のそれと比べて著しく減少している。とくに人口の減少率が世帯数の減少率に比べて高くなっている。これは、若年層の大幅な島外流出に起因するものである。なお、昭和38年(1963)にはツブラにおいて、昭和50年には田崎において居住者がすでにみられない。

3. 生 業

まず、杣島全体を単位とした最近の生業形態についてふれておこう。

産業別就業者数の変化を示したものが第3表である。これによると、杣島では農業と漁業が産業の主体であることがわかる。しかし、昭和40年(1965)に247人(総就業者数の35.4%)あった農業就業者は、昭和50年(1975)には14人(5.1%)へと激減している。昭和50年の地目別面積を示したものが第3図であるが、これによると、耕地面積は、田が0.10 km²、畑が0.78 km²、計0.88 km²で、杣島の総面積の8.5%にすぎないことがわかる。

一方、漁業就業者数も総就業者数の減少にともなって減少している。しかし、総就業者数に占める漁業就業者数の割合は高まる傾向をみせている。

つまり、昭和40年頃までつづいた杣島の半農半漁村的性格は、昭和50年には純漁村的性格へと変化をとげているのである。

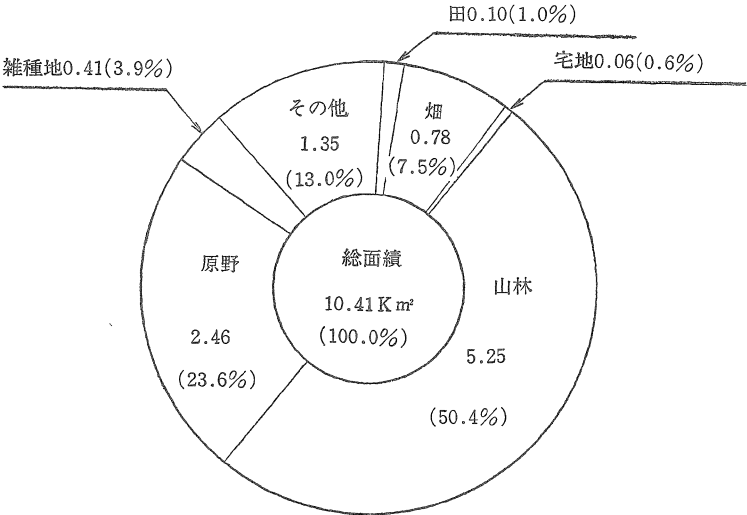
ところで、杣島ではかつて地下部落とよばれたところは漁村的色彩が強く、点在部落とよばれたところは農村的色彩が強いといわれている⁹⁾。事実、漁家のほとんどが、本窯、伊福貴の2集落に集中している。しかし、第4表の旧組別の農家数をみればわかるように、かつての点在部落だけに農家が多いとは必ずしもいえないのである。

以上のことから、筆者は、かつての地下部落を漁村、点在部落を農村として区別することなく、まず、杣島をひとつの島社会としてとらえ、そのうえで漁業協同組合が本窯町、伊福貴町にそれぞれ組織されている⁹⁾ことに注目して、現在の

第3表 産業別業就者数の変化

年	総人口	就業者総数	第1次産業				第2次産業			第3次産業					
			総数	農業	林業	水産養殖業	総数	建設業	製造業	総数	卸売業	小売業	運輸業	電気ガス業	サービス業
昭和25 (1950)	3311	1587 (100.0)	1147 (72.3)	521 (32.8)	1 (0.1)	625 (39.4)	243 (15.3)	17	226	197 (12.4)	50	52	0	78	17
35 (1960)	2540	1119 (100.0)	918 (82.0)	497 (44.4)	3 (0.3)	418 (37.3)	47 (4.2)	11	36	154 (13.8)	44	35	0	23	52
40 (1965)	1855	697 (100.0)	527 (75.6)	247 (35.4)	2 (0.3)	278 (39.9)	36 (5.2)	26	10	134 (19.2)	29	35	4	57	9
50 (1975)	844	274 (100.0)	166 (60.6)	14 (5.1)	0 (0)	152 (55.5)	14 (5.1)	12	2	94 (34.3)	20	24	0	45	5

注) ()内は就業者総数に占める割合
(福江市役所資料による)



第3図 地目別面積 (昭和50年 (1975))
(福江市役所資料より作成)

第4表 旧組別の漁家数および専業別農家数

町 名	旧 組 名		昭和35年（1960）					昭和45年（1970）					
			総戸数	農家数	専業農家	兼業農家		総戸数	漁家数	農家数	専業農家	兼業農家	
						1種	2種					1種	2種
本 窯 町	地下部 落点 在部 落	先ノ組	43	27	2	7	18	32	0	19	4	0	15
		中ノ組	60	47	2	5	40	29	13	22	1	1	20
		村ノ組	31	21	5	6	10	15	3	11	1	0	10
		芦ノ浦	47	44	9	10	25	30	28	27	4	0	23
		竹ノ浦	33	25	4	0	21	19	10	17	2	0	15
		田崎	20	20	1	2	17	3	2	3	0	2	1
伊 福 貴 町	地下部 落点 在部 落	先津	61	45	0	6	39	60	45	28	1	0	27
		中津	74	50	24	1	25	62	40	22	1	0	21
		向津	73	53	3	3	47	42	40	35	6	0	29
		前海	49	42	7	4	31	25	15	22	5	5	12
		後海	36	34	4	6	24	23	18	17	3	2	12
		計		527	408	61	50	297	340	214	223	28	10

(1970年世界農林業センサスによる)

行政上の町単位をひとつの漁村としてとらえる〔藪内，1958：p. 29〕ことにする。したがって，以下で用いられる本窯，伊福貴は，とくにことわりのない限り集落名ではなく，町単位の「本窯漁村」，「伊福貴漁村」を表わすものとする。

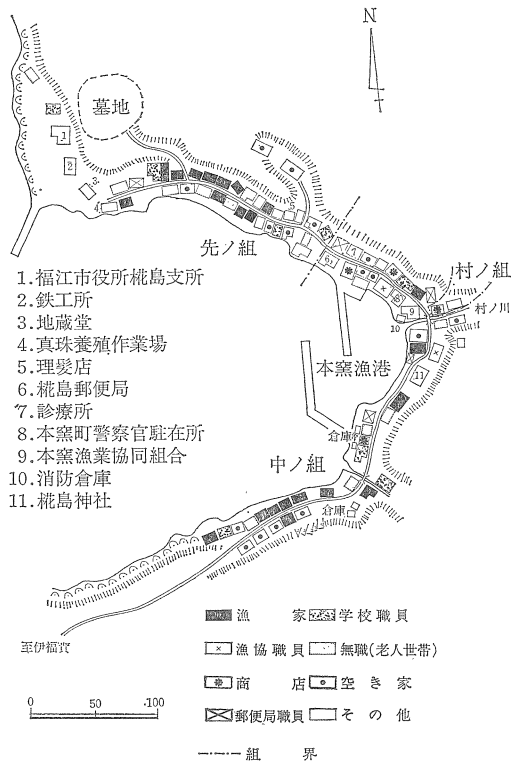
4. 本窯，伊福貴両集落の現況

本節では，本窯，伊福貴両集落の現況についてふれておきたい。

本窯では，集落が漁港⁴⁾をとりまくようにして形成されている（第4図）。杵島郵便局より北側が先ノ組，南側が中ノ組にあたる。村ノ組は本窯漁協の東側から村ノ川に沿うやや高所にひろがっている。

本窯は，旧幕時代から杵島の「本ムラ」であり，伝統的に島の中心的役割をはたしてきた。したがって，現在でも，福江市役所杵島支所，杵島郵便局，本窯町警察官駐在所（杵島で唯一の駐在所）など，島の公共機関が本窯に集中している。

第4図には職業別の家屋の分布を示している。最も多い職業は漁業である。残



第4図 本鯨漁港周辺概略図(昭和52年(1977)8月)

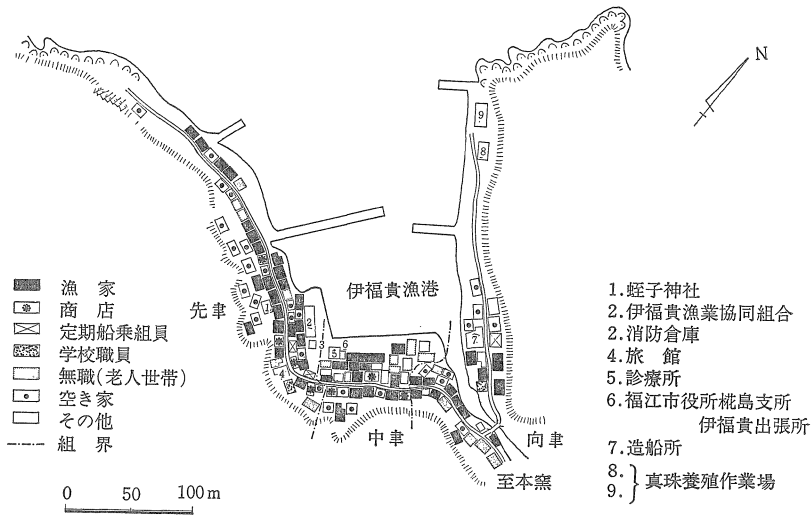
りは、学校職員、郵便局職員、商業などである。無職のところは全て老人世帯である。また、空き家がかかなり多くみられるが、これは挙家離村によるものであろう。しかし、老人世帯のうちには、離村していたが、最近になって再び島にもどってきた世帯もある。

伊福貴へ至る道路は、コンクリート舗装がなされているものの幅員 1.5m 前後で、自動車は通れない。この道路は主として小、中学生が首ノ浦にある小、中学

校⁶⁾へ通学するために使用されている。

伊福貴の集落は漁港⁶⁾の東、南部に集中している（第5図）。これらは、明治時代の漁業の発展にともなって形成されたといわれている〔小松，1959：p. 18〕。家屋はかなり密集しており，とくに先聿，中聿の道路に面したところは軒のひくい家がつらなり，いわゆる漁村の色彩を呈している。

職業としては漁業が多い。無職の世帯も多いが，これらは本窯と同様，老人世帯である。また，空き家も多くみられる。



第5図 伊福貴漁港周辺概略図（昭和52年（1977）8月）

Ⅲ 漁業の史的展開

1. 近世期

枕島にいつ頃から人が居住し始めたのかは明らかではないが，平家の落人伝説⁷⁾や和寇の伝承⁸⁾が語りつがれていることから考えると，相当古い時代にさかのぼることが可能である。しかし，当時の生活の状況は，史料が少ないのでほとんど

明らかにされていない。ただし、島には平地が少なかったので、島民は農業だけでは生活できず、早くから漁業もおこなっていたようである。

さて、杣島において漁業が発展しはじめるのは、五島藩々政期に至ってからである。近世期の杣島は、五島藩によって 窠方百姓の島として区分されていた。寛文元年（1661）、五島藩から富江領がわかれて、杣島は富江領下となった。その際にも五島藩期と同様に、窠方百姓の島という地位は受け継がれた。窠方百姓は、領主に対して年貢として塩を納入するとともに、地方百姓と同様に夫役を納め、かつ材木、薪、松木の搬出を義務づけられた。また、盆、年始には、塩、いも、炭などを徴発された〔長崎県、1973：p. 642〕。しかし、島の森林資源には限界があったので、塩や薪炭の製造を長期間維持してゆくことは困難であった。そこで、早くも享保期（1716～1736）には、漁業を中心とした生業への転換がおこなわれている。すなわち、この頃、鰯網が杣島に導入され、釣漁業もなされているのである〔宮本、1952：p. 95、竹田、1966：p. 733〕。

鰯網は地曳網や、八田網と呼ばれる敷網であつたらしい。とくに八田網は、享保年間より九州の干鰯が肥料として不可欠になった〔長崎県、1973：p. 729〕ことに応じて、さかんに操業されるようになった。八田網は、網船2隻（各15人乗り）、口船2隻（各10人乗り）、火船1隻（7人乗り）から構成された。漁法は、火船を中央にして網船、口船が左右に分かれて網を下した後、目合の大きい網の方から目合の小さい網の方へ網を縮めてゆき、魚をすくい取るというものであった。

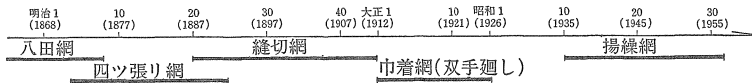
以後、明治にかけて、鰯網漁業が活発におこなわれたのである。

鰯網の隆盛にともなって、島の人口は増加する結果となった。島には多くの移住者が、網元をたよって流入したのである。こうして、漁業は集団化、大規模化していった。すなわち、漁業の発展によって、社会、経済は近世において早くも前期資本主義的段階に入り、今や地縁的村落共同体より利益共同体へ、そして一部はすでに生産共同体へと移行し、離島としては例外的な進歩を示したのであった〔山階、1952：p. 6〕。

2. 明治・大正期

明治の初期には、本窯に「新屋^{しんや}」の屋号をもつ網元があった。新屋は、芦ノ浦でおこなったシビ網^めによって成功し、巨大な資本を蓄積した。その勢力は、くミヤコ（九州本土のこと）をはじめ大阪あたりまで知れわたっていたといわれている⁹⁹。そこで、新屋のもとで働ければ生活ができるということで、島外からも多くの人々が流入した。この時集まった人々の大部分は、福江島の大浜、崎山あるいは久賀島といった農村部の次、三男以下であった。現在みられる本窯、伊福貴両漁港周辺の集落が漁村としての体裁を整え始めたのもこの頃である。

さて、明治初期まで八田網は継続されたが、それ以降は鰯網の改良期といっても良く、昭和初期に動力船揚繰網が導入されるまで、種々の漁網が10～20年ごとにとり入れられた。主要な漁網とその使用期間を示すと、第6図のようになる。



第6図 主要な漁網とその使用期間

明治初期には、八田網に並行して四ツ張り網が導入された。これは矩形の敷網の一種で、網船2隻（各12～13人乗り）、口船2隻（各7～8人乗り）、火船2隻（各6人乗り）の6隻によって構成されていた。これは明治24、25年（1891、92）まで使用された〔竹田、1966：p. 733〕。つづいて、明治20年（1887）頃から縫切網が導入された。網の構造は四ツ張り網とほとんど変わりがなく、漁船も四ツ張り網当時のものが使用された。これは大正初年（1912）頃まで用いられた〔竹田、1966：pp. 733-734〕。縫切網を圧倒したのが巾着網であった。これはまき網の一種で、網船1隻で操業される片手廻しと2隻で操業される双手廻しとがあった。杵島にはこのうちの双手廻しが導入された。大正初年頃から大正末年（1926）頃まで使用された。

以後、昭和に入って動力附片手廻しによる揚繰網が中通島から導入され、これによって杵島は急激な漁業の発達をみるにいたるのである。

IV 揚繰網の定着と繁栄

1. 揚繰網の定着

巾着網漁業がおこなわれなくなった昭和初期、杵島の漁民は、島内で釣漁業や小規模な網漁業に従事するか、あるいは中通島の奈良尾あたりの揚繰網に漁夫としてくわわっていた。しかし、漁民たちは、五島列島各地での揚繰網の繁栄ぶりをみたことから、地元の振興を目的とする揚繰網資本の誘致に努力し始めた。その結果、昭和10年（1935）頃、中通島の岩瀬浦から杵島へ揚繰網がはじめて導入された。以後、揚繰網の島内流入が続き、揚繰船が杵島を根拠地として活躍し始めた。

第二次世界大戦中、揚繰網漁業は一時停滞した。しかし、戦後になると、五島近海にイワシ、アジ、サバなどの資源が豊富であったことから、すみやかに復興し、活発化していった。昭和25年（1950）頃的全盛期には、本窯に6統、伊福貴に9統の網があり、これらによって揚繰網漁船団が組織されていた（第5、6表）。

このような漁船の集中は、結果的に漁獲高を急増させ、杵島を五島有数の揚繰網漁業基地に発展させた（第7図）。杵島の漁獲高は、一時期、五島一の漁業基地といわれた奈良尾の漁獲高をしのいだこともあった（第7表）。

第5表 本窯揚繰網漁船団
（揚繰網漁船6統，団長：伊藤博道）

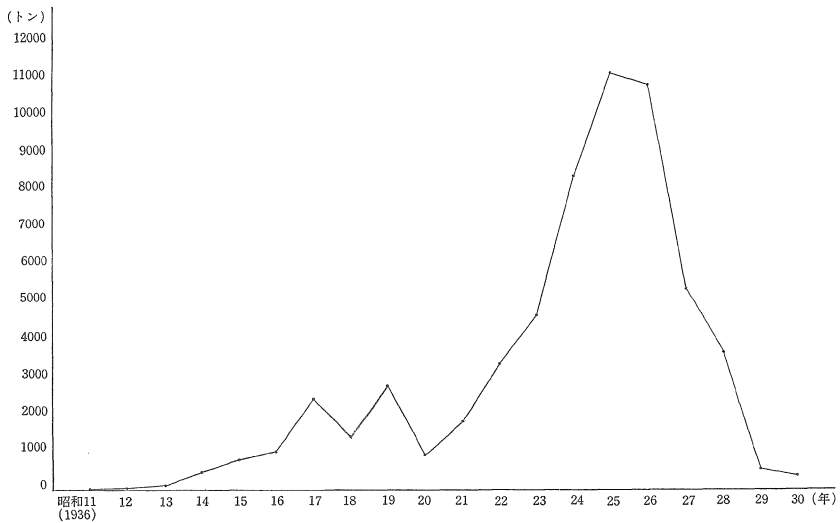
組 織 名 (社 名)	漁 船 名	資 本	責 任 者	創 業 年
福 宝 丸 漁 業 部	福 宝 丸	島 内	伊 藤 博 道	昭和19. 10
日本水産株式会社	第五日海丸	島 外	鈴 木 福 太 郎	?
〃	第六日海丸	〃	〃	?
才 川 水 産 部	元 幸 丸	〃	吉 村 保 雄	?
福 祥 丸 漁 業 部	福 祥 丸	島 内	原 田 甚 吉	24. 7
いなり丸漁業部	い な り 丸	〃	小 林 道 徳	?

（ききとりおよび「九州水産春秋社，1950，1952」による）

第6表 伊福貴漁船団
(揚繰網漁船9統, 団長: 石本熊蔵)

組 織 名 (社名)	漁 船 名	資 本	責 任 者	創 業 年
石本水産株式会社	第二蛭子丸	島 内	石 本 熊 蔵	昭和23. 6
〃	第三蛭子丸	〃	〃	〃
大洋水産株式会社	第一大洋丸	〃	川 瀬 知 通	23. 8
樺 島 営 業 所	第二大洋丸	〃	〃	〃
〃				
稲 荷 丸 漁 業 部	稲 荷 丸	〃	松 永 修 一	24. 8
永 幸 丸 漁 業 部	永 幸 丸	島 外	永 田 福 一 郎	25. 11
興洋漁業株式会社	興 漁 丸	〃	本 多 金 一 郎	?
長崎漁業株式会社	魚 生 丸	〃	大 多 盛 義	?
才 川 水 産 部	立 山 丸	〃	前 田 宗 十 郎	?

(ききとりおよび〔九州水産春秋社: 1950, 1952〕による)



第7図 伊福貴における漁業生産量の変化 (〔竹田, 1966〕による)

当時、伊福貴では、一本釣、延縄をおこなういわゆる小漁師が存在した。しかし、その数は杣島の全漁民数の5～10%にすぎなかった。しかも、小漁師の大半が、揚繰網から退いた老年層の漁民によって占められていた。また、釣漁業に使

第7表 揚繰網根拠地の漁獲高（昭和24年（1949）2.1～7.31）

地名 魚種	杵 島	奈 良 尾	奈 留	若 松
イ ワ シ	1,797(トン) (87.8)	1,809(82.8)	705(93.0)	1,048(89.5)
サ バ	111(5.4)	62(2.8)	0(0)	86(7.3)
そ の 他	138(6.7)	313(14.3)	53(7.0)	37(3.2)
計	2,046(99.9)	2,184(99.9)	758(100.0)	1,171(100.0)

()内は％ (〔長崎時報社, 1950〕による)

用された漁船は無動力和船を主体としており、漁獲量も少量であった。

以上のように、当時の杵島は、全体的にみると、揚繰網という単一の漁業によって繁栄した網漁村であった。前掲第7表は、昭和24年（1949）2月から7月までの半年間の漁獲高を示すにすぎないが、このうちイワシ、サバが全体に占める割合が93.3%となっていることから、杵島の漁業が単一的であったことは明らかである。

2. 漁業形態

揚繰網1統は、本船1隻（約20人乗り）、母船1隻（5～6人乗り）、火船2隻（各5～6人乗り）によって構成されていた。このほか、漁獲した魚を早急に運搬するための鮮魚運搬船が必要とされた。操業は通常1日単位でおこなわれた。船団は、夕方出港し、夜間沖合で操業を続け、翌朝には港へ戻ってきた。ただし、1ヶ月のうち、旧暦の15日前後の数日間は〈ツキヨマ（月夜間）〉と呼ばれるが、この期間は、夜間、月の明るさのために海上が明るくなり、魚を集めるために火をたいてもその効果がなかったため、船団は休漁した。この間、漁夫は休暇をとったり、網干し、網修理などの作業をおこなった。夜間でも早い時刻に漁獲された魚は、長崎の市場に間にあうように運ばれ、時間的に市場に間に合わない場合には、魚は島に水揚げされ水産加工用にまわされた。

操業域は、主として五島列島近海であったが、漁期および漁獲対象魚種によって、

①五島灘，②済州島近海までを含む五島西海域，③生月島，小値賀島近海，の3海域に大別された〔長崎県商工水産部，1953：p. 144〕。操業海域と漁期との関係を示したものが第8図である。五島灘は，夏から秋，冬にかけて7ヶ月間以上，操業が可能であり，3海域中最もよく利用された。いうまでもなく，季節によって漁場をかえれば，天候が不順なために網干し⁽⁴⁾が不可能となる梅雨期（6月中旬～7月中，下旬）を除いて，終年操業が可能であった。

海域 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
①五 島 灘	大羽イワシ					梅 雨 期		中羽イワシ			大羽イワシ	
②五 島 西 海 域	大羽イワシ											
③生月・小値賀近海	アジ・サバ・イワシ											

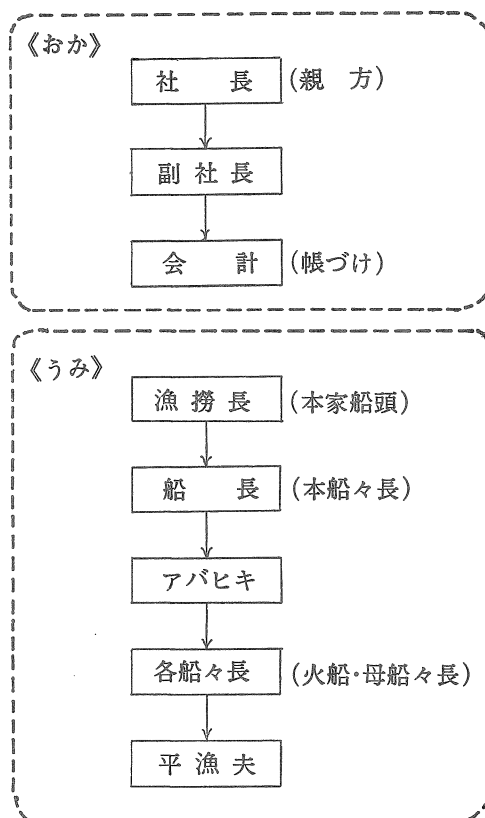
第8図 揚繰網の操業海域および漁期

網1統に必要なとされた漁夫の数は50～60名であった。したがって，最高時，800～1000人の漁夫が杵島に集中していたと推定できる。漁夫は，各揚繰網経営体に月給制で雇われていた。

1統に関係した人の組織は第9図のように示される。

社長（親方）は経営者であり，副社長は支配人的な役職であった。会計は，「帳づけ」とよばれ，漁獲量を克明に記録する責任を負っていた。会計は，漁夫と共に漁船に乗りこんで，直接沖へ出て仕事をする場合もあった。以上の3者は，《おか》側ということができよう。地元資本の網では，これらは縁故者によって構成されることが多かった。島外の企業資本による網の場合には，《おか》側は会社経営体の中に組みこまれており，組織はもっと複雑に分化していたことはいうまでもない。

《おか》側に対して，直接海上において漁撈活動にあたった方は，《うみ》側とよぶことができよう。《うみ》側では，漁撈長が総責任者の役割にあった。漁撈長



第9図 揚繰網の組織

は、2隻ある火船の主たる方の船長で、「本家船頭」ともよばれ、出漁した際、火をたく位置を選定する権利を有していた。つまり、漁撈長の判断の良し悪しが、その日の好、不漁に直接影響を及ぼした。〈アバヒキ〉は、本船に乗っており、網をひく平漁夫を監督する役割であった。各船々長というのは、残りの母船々長および従たる火船の船長をさす。従たる火船の船長は、主たる火船の船長である「本家船頭」に対して「隠居船頭」ともよばれた。これらの船長は、二重汐の発生を調べて〈アバヒキ〉と連絡しようという重要な仕事をうけもっていた。二重汐と

いうのは二水塊の不連続によって発生する海象のことである。これが発生すると、網を張ることが不可能となった。そこで、船団は二重汐を未然に察知しなければならなかった。各船長は、鉛のおもりをつけた長さの異なる2本の網を海中にたらし、海水の流動方向を調べたのである。

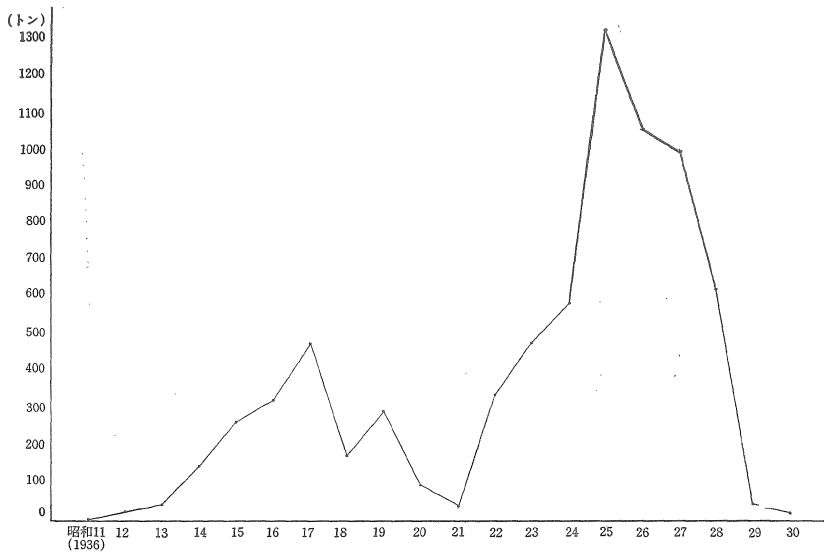
平漁夫を除いた《うみ》側の漁夫は、いわゆる「役づき」で、平漁夫の給与を一人前とした場合、彼らは一人前半や二人前といった高給で雇われていた。平漁夫のほうでも、網をあげる時のローラー係やコック（普通、漁船に乗って間もない若年者があてられた）など様々な役職があり、役職に応じて給与が支払われていた。

前述したように、揚繰網全盛期には800～1000人近い漁夫が杵島に集中していた。彼らの全てが杵島出身者というわけではなく、その中には福江島、久賀島などの農村部から来島した農家の次、三男以下が多く含まれていた。時には、五島以外の漁夫が漁船と共にもたらされたこともあった。彼らは、毎日、船上か網小屋を利用して寝泊りし、休漁となる〈ツキヨマ〉と梅雨期だけ実家へ戻る、という生活が続いていたようである。

3. 島内の水産加工業

揚繰網によって漁獲されたイワシは、鮮魚として長崎方面へ運搬されるだけでなく、島内に水揚げされ、主として煮干に加工された。煮干製造は設備費が少なく、すむ家内工業的性格を有していたので、イワシの豊漁とともに年々加工業者が増え続けた。昭和22年（1947）には本窯に55業者、伊福貴に62業者、昭和23年（1948）にはそれぞれ73業者、78業者、昭和24年（1949）にはそれぞれ89業者、88業者を数えた。昭和25年（1950）における製造業就業者数は、226人と、全就業者数の14.2%にあたっている（前掲第3表参照）。これらのほとんどすべてが水産加工業に関係していたと考えられる。

業者数の増加とともに生産量も増加した。第10図は、伊福貴における水産加工品の生産量の変化を示したものである。これをみると、生産量は、昭和22年（1947）



第10図 伊福貴における水産加工品の生産量の変化（〔竹田，1966〕による）

から急増し、昭和25年（1950）にピークをむかえていることがわかる。

煮干製造は、イワシをカゴに入れて釜の中でゆで、それを〈ナダナ〉と呼ばれる竹製の棚にのせて天日で数日間乾燥させる、という簡単な作業であった。できあがった煮干は、1貫ずつ袋づめにされて出荷された。製品の取引は、一般に、仲買人の入札によっておこなわれていた。

春先になってイワシに油がのりはじめると、煮干は変色しやすくなり、その製品価値が下がった。そこで、春には、しめかすの製造にきりかえられた。また、梅雨期には、揚繰網が休漁となること、天候が不順なために製品が腐敗しやすくなることなどの理由から、ほとんどの加工業者が休業した。

V 揚繰網の衰退

1. 衰退の原因

五島近海では、昭和29年（1954）頃からイワシの漁獲量が激減しはじめた。こ

れにともなって、杣島の揚繰網漁業は衰退の一途をたどり、島の産業構造も急激に変化をとげた。

ここで、本窯の資本家A氏がおこなっていた地元網を事例として、網の導入から倒産にいたるまでの過程を示そう。

本窯には島外の企業資本による揚繰網がはいっていた。それらは本窯漁港や竹ノ浦、首ノ浦の湾入部を碇泊地として使用していた。網にくわわる漁夫の多くは地元民であったが、彼らは賃金雇用というかたちで企業に労働力を提供しているにすぎなかった。船団の港湾施設使用、水産加工業などによって地元にもたらされる利益も限られていた。

本窯の漁民は、地元の資本による揚繰網がないことをうれいていた。そこで、漁民が協力して地元の網をつくろうとする動きがおこった。この時、地元には資本の蓄積がなかったので、銀行から融資をうけることが是非とも要求された。そのため、当時、村役場の出納長の職にあったA氏が、職業柄資金集めに最適であったので、彼が中心となって事業をすすめることになった。

網は、最初、A氏を加えた3人の親方の協同網というかたちで始められた。しかし、経営は1年目からゆきづまり、A氏は2年目に分離独立した。

A氏の網は、当初は近海にイワシが豊富であったことから成功をおさめた。しかし、資源量の減少は早かった。その後、イワシを求めて北松（北松浦方面）、^{ほくしやう} 済州島方面まで出漁したこともあったが、結局うまくゆかず、昭和28年（1953）には大きな負債をおって倒産してしまった。

以上の事例を参考にしながら、漁獲量の激減とそれにとまなう揚繰網の衰退の要因についてまとめると、つぎのようにいうことができる。

- ① 漁獲対象魚種が、これまで利用していた漁場から移動したことがあげられる。イワシは暖海性回遊魚種であるが、これが何らかの海況の変化によって五島近海から離れ、漁場が山陰沖合や東シナ海方面へ移動してしまったのである。

- ② 利用漁場における漁獲対象魚種の豊度が低下した。当時、五島近海には揚繰網漁船が、過度に集中していた。そのことが、結果的に、イワシの乱獲をひきおこしたのである。

そして、これらの要因に、以下に示すような二次的な原因が加わることによって、杵島における揚繰網の衰退と産業構造の変化が、一層早まったのである。

- ① 海況の変化が揚繰網漁場を移動させたために、漁業根拠地は、漁獲物の消費、流通に有利な長崎をはじめとする九州本土へ移行する傾向が生じた。したがって、離島の性格をもっていた杵島は、漁業根拠地として不適当となった。

杵島に集中していた揚繰網15統のうち、7 統が日本水産、大洋漁業などの島外の企業資本による網で、残り8 統が地元資本による網であった。地元資本の揚繰網は、イワシの好景気時期に問屋資本の導入によって網の責任者となった者が資本を蓄積して独立し、始めたもの、あるいはイワシ景気に乗じて銀行から融資をうけた者によって始められたものであった。こうした資本家は、少ない資本を土台として、ただ将来の豊漁だけを確信して着業したのである。

不漁とともに、島外資本による網は杵島から速やかにひきあげ、地元資本の網は、漁夫への賃金不払いや借金を繰り返しながら、結局倒産におこまれた。

- ② 当時の揚繰網本船は、その大きさから35トン型と呼ばれた。これは遠洋へ出漁するには小型すぎた。昭和30年（1955）頃、奈良尾や岩瀬浦などでは60トン型本船が建造され、東シナ海方面への漁場の拡大化がはかられた。しかし、杵島では資本の蓄積がなかったため、このような本船大型化はなされなかった。

資本の蓄積がなかったのは、杵島が島外資本の揚繰網を誘致するというかたちで根拠地化されたことに起因している。すなわち、島が得られた利益は、たとえば、港湾およびその付属施設の提供に対して支払われる賃賃料や手数料、年中行事の際に集められる寄附金、水産加工業による利益などにすぎず、島はほとんどうろかわなかったのである。

2. 揚繰網衰退以降の展開

揚繰網資本は、昭和29年（1954）頃から島外へひきあげたり、倒産し、昭和32年（1957）には、網は島から完全に姿を消してしまった。これにともなう、島内には漁業失業者が数多く生みだされた。また、揚繰網に関連していた水産加工業者も廃業を余儀なくされた。

地元の失業者のうちには、島内で釣漁業に就労したものがいた。しかし、本来漁業以外に主たる生業がみられなかった杵島では、一時的にしろ多くの失業者をかかえこむことは不可能であった。したがって、ほとんどの失業者が、出稼漁夫として島外へ流出することになったのである。

以下でこれらの展開過程を個別的に検討してみよう。

- ① 揚繰網繁栄期には、地元の漁夫に加えて、福江島、久賀島などの農村部から来島した出稼漁夫が就労していた。このような出稼漁夫は、全漁夫の約 $\frac{1}{2}$ を占めていたといわれている。彼らは、網の衰退によって、杵島からひきあげた。
- ② 揚繰網の衰退によって排出された杵島の失業漁夫のうちの青・壮年層の多くが、出稼漁夫として島外に就業の機会をもとめた。彼らは、奈良尾の揚繰網漁船に再び乗り込んだり、あるいは一部は血縁関係による遠隔地〔中楯、1963：p. 65〕へ就業することもあった¹⁰⁰。

第2次漁業センサスによると、昭和28年（1953）には島内から145名の出稼漁夫がでていたことがわかる。このうちの141名が長崎県内への出稼である。また143名がイワシ揚繰巾着網漁業に就業している。

- ③ 杵島の失業漁夫のうち、高齢者を中心とした一部分は、島内に残って小規模な釣漁業をおこなった。昭和24年（1949）には島内に35隻しかなかった無動力船が昭和28年（1953）には129隻に増加していることから、それがうかがえる。
- ④ 水産加工業は、揚繰網に関連していた産業であった。したがって、加工業者は網の衰退によって廃業せざるを得なかった。島内の製造業就業者数は、昭和25年（1950）には226人であったが、昭和35年（1960）には36人に減少して

いる。

昭和35年（1960）から昭和40年（1965）にかけて、わが国は経済の高度成長期をむかえた。これは杣島の人口流出にも拍車をかけた。すなわち、漁業出稼者や農業者が、工場労働者として、九州本土、大阪方面へ流出したのである。挙家離村形態が生じ始めたのもこの頃からである。

若年層も、島内の中学校を卒業してからは、進学のために福江島や長崎市内に出たり、あるいは集団就職によって九州本土、大阪方面へ出るようになった。したがって、漁業に着業する子弟もおのずと減少してしまったのである。

この間、漁業就業者数の減少を抑えようとして、昭和35年（1960）には佐賀県の呼子から^{よびこ}双手巾着網2統が、以前に揚繰網を経営していた地元の資本家によって誘致された。しかし、不漁が原因で操業は長く続けられず、昭和38年（1963）には2統ともひきあげている。また昭和40年（1965）には、同じ資本家が、瀬ぎの魚の漁獲に将来をかけて、20トン型鉄工船を本船とする巾着網の操業を手がけた。しかし、やはり不漁が原因となって、操業は昭和49年（1974）に中止されている。

VI 最近の漁業

揚繰網が衰退した後、杣島では、多額の資本や敗退した沖合漁業の弱点であった多くの雇傭漁夫を必要とせず、腕一つで相当の収益をあげることができる〔藤岡、浮田、1975：p. 224〕一本釣やはえなわなどの沿岸漁業が、主体をなすようになってきた。これにくわえて、真珠養殖やハマチ養殖がわずかながら導入されている。島内の漁業就業者数は、揚繰網当時とは比較にならないほど少ない。しかし、最近ではタイ一本釣が好調であることから、就業者数は徐々に増加する傾向をみせ始めている。

以下では、本窯と伊福貴の漁業の概観についてのべた後、最近の漁業形態とし

て、伊福貴を中心としておこなわれているタイ一本釣りおよびハマチ養殖業の現況についてふれたい。

1. 本窯と伊福貴の漁業

本節では、第5次漁業センサス（昭和48年11月1日調査）結果と各漁協の資料をもとにして、本窯、伊福貴の漁業を概観する。

まず、漁業種類別経営体数をみると、本窯では48経営体のうち40経営体が釣り、6経営体のはえなわをおこない、伊福貴では61経営体のうち53経営体が釣り、4経営体が刺網、2経営体のはえなわをおこなう（第8表）。すなわち、漁業の主体は両漁村とも釣漁業である。専業別個人経営体については、本窯では48経営体の

第8表 漁業種類別経営体数（昭和48年（1973））

漁業種類 漁協地区	まき網	刺 網	釣 り	はえなわ	採 貝 採 草	海面養殖	総 数
本 窯	0 (0)	2 (4.2)	40 (83.3)	6 (12.5)	0 (0)	0 (0)	48 (100.0%)
伊 福 貴	1 (1.6)	4 (6.5)	53 (86.9)	2 (3.3)	0 (0)	1 (1.6)	61 (100.0%)

（第5次漁業センサスによる）

うち、専業が14経営体（29.2%）、兼業が34経営体（70.8%）、伊福貴では57経営体のうち、専業が51経営体（89.5%）、兼業が6経営体（10.5%）となっている。本窯、伊福貴漁協の組合員数は、昭和52年（1977）7月現在で、それぞれ100名、142名となっている。組合員はいずれも正組合員である。登録漁船は、昭和52年現在で、本窯に60隻（うち3トン未満：40隻、3～5トン：16隻、10～20トン：4隻）、伊福貴に64隻（うち3トン未満：43隻、3～5トン：20隻、5トン以上：1隻）ある。ほとんどの漁船が5トン未満である。第9表は、杵島全体の漁船隻数の変化を示したものである。動力船隻数のうち、5トン未満の漁船の数および総数に占める割合は高まる傾向にあることがわかる。これは釣漁業の定着を示すものである。

第9表 漁船隻数の変化

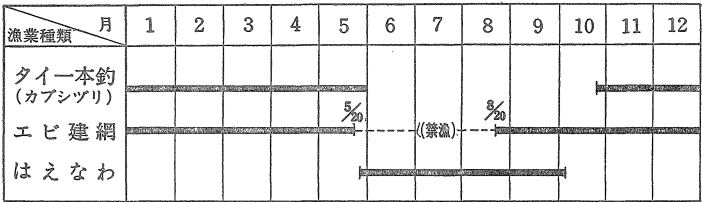
年	総隻数	無動力船	動力船				
			総数	5トン未満	5～10トン	10～20トン	30～50トン
昭和28(1953)	159(隻)	129	30	21	0	5	4
33(1958)	179	126	53	43	1	9	0
36(1961)	142	76	66	56	6	4	0
38(1963)	135	71	64	60	2	2	0
43(1968)	106	21	85	—	—	—	—
48(1973)	118	18	100	—	—	—	—
52(1977)	—	—	124	119	1	4	0

注) 昭和33年, 36年の数値は〔竹田, 1966〕, 昭和52年の数値は, 伊福貴, 本鯨漁協でのききとり結果, その他は漁業センサスによる。
—: 不明

ところで, 伊福貴の場合, 漁船は全て伊福貴漁港を利用している。しかし本鯨では本鯨漁港だけではなく, 各集落の近くにある湾入部が碇泊地として利用されている。集落ごとの漁船隻をみると, 本鯨に45隻, 芦ノ浦に6隻, 竹ノ浦に5隻, 越首, 首ノ浦にそれぞれ2隻ずつとなっている。

2. タイ一本釣漁業

枕島の漁業暦を示したものが第11図である。中心となる漁業種類は, タイ一本釣である。タイ釣の漁期は, およそ10月から翌年の5月までである。したがって,



第11図 主要な漁業の漁業暦

タイ釣漁師は、夏季には、はえなわ（漁獲対象魚種はレンコダイ、イトヨリ、アマダイ、ムツなど）あるいはカツオのさお釣、イカ釣、イサキ釣などをおこなう。

最近、タイ釣は好調である。1隻が、1日に80～100kg、金額にして10数万円にのぼる漁獲高をあげることがある。また、漁期だけで、1人の漁師が300～400万円の収益をあげるといわれている。そのため、漁師の間では、「タイ釣時期に働いて、はえなわ時期で遊ぶ」という声がかれるほどである。第10表は、昭和51年度（1976）の伊福貴の漁獲量である。魚種のうちではマダイの漁獲高が抜きん出ていることがわかる。

第10表 伊福貴の漁獲量（昭和51年（1976））

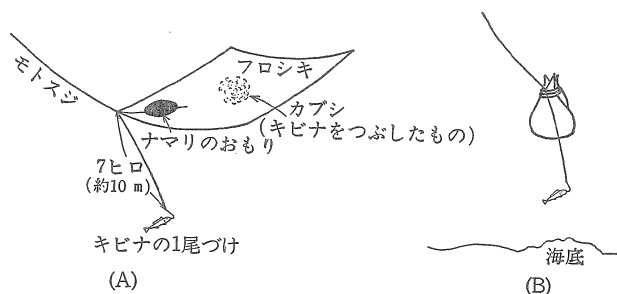
魚 種 名			漁 獲 量
マ	ダ	イ	30,249(kg)
レ	ン	コ	7,400
イ	ト	ヨ	5,537
マ	マ	ダ	3,503
ム		ツ	6,139
ヒ	ラ	メ	200
ヒ	ラ	ス	5,403
イ	サ	キ	17,002
ク		ロ	795
カ	ツ	オ	997
イ	セ	エ	638
サ	ザ	エ	2,716
ヒ		サ	205
ス	ズ	キ	227
ア	ワ	ビ	211
そ	の	他	10,037
計			91,259

（伊福貴漁協資料による）

注）レンコダイは和名キダイ、ヒラスは和名ヒラマサ
クロは和名クロダイ、ヒサは和名インダイ

タイ一本釣は、一般に〈カブシヅリ〉とよばれる。以下、漁具、漁法について説明しておこう。

まず、漁師は、黒い木綿でできた 30~40cm 四方の布（杵島ではこれを〈フロシキ〉とよぶ）を用意する。布の一隅には約 1kg のナマリのおもりがつけられ、同じ隅が釣糸の〈モトスジ〉とつながれる。漁をおこなう時には、漁師は、布の真中に数尾のキビナゴをつぶした〈カブシ〉（キビナゴをつぶしたもの）を入れ、釣針にはキビナゴを一尾つける（第12図A）。つぎにこの布の四隅をつまんで、おもりと〈カブシ〉を包みこん



第12図 タイ一本釣（カブシヅリ）の漁具〔模式図〕

で袋状にし、その口を〈モトスジ〉でゆわえる（第12図B）。これを海中に沈め、一旦、海底までおろす。その後、海底から7~8ヒロ（10~12m）ほどひきあげたところで〈モトスジ〉を揺さぶり、ゆわえてあった布をひろげる。すると布の中に入れていた〈カブシ〉が海中に散らばる。そして、〈カブシ〉につられて寄ってきたタイが、最も大きな一尾づけのキビナゴにひっかかることになる。1人の漁師が、普通2本の釣糸を操作する。漁師は、エサとして使用するキビナゴを自給しなければならない。したがって、1日の漁撈活動は、早朝、近海へキビナゴをとりに行くことから始められる。キビナゴは刺網によって漁獲される。漁師は、この操業に1~2時間を要した後、一旦港へもどり、漁獲したキビナゴを網からはずし、〈カブシ〉を作ってタイ釣の準備をする。準備が完了すると、タイ釣漁場へ出漁する。

操業は普通1人でおこなわれる。和船が使用されていた頃には、1隻にこぎ手や釣り手など2～3名の漁師が乗りこんでいた。すなわち動力化は省力化につながっているようである。昭和52年（1977）7月現在、伊福貴において漁船1隻に2名が乗りこんで操業していたのは、5例（父子4例、兄弟1例）にすぎなかった。

海上での操業時間は平均すると6時間ぐらいで、漁師は午後2～3時になると帰港した。

タイ釣漁場は、主として杣島周辺の海域である。一般に以下のような漁場が好漁場として知られている。

カドノソネ——杣島南西沖、冬場によい。

デバリ——杣島南西沖、カドノソネより遠方にある。冬場によい。

オオギヤマ——杣島西沖、伊福貴から速い漁船で1.5時間ぐらい要する距離にある。春季によい。

ニシ——久賀島の北方にある。春季によい。

昭和51年度（1976）の伊福貴のマダイの漁獲量は、第11表に示す通りである。3～4月が盛漁期にあたる。この頃漁獲されるタイは、季節柄〈サクラダイ〉とよばれる。5月にはいとタイはやや黄味をおびてくることから、〈ムギワラダイ〉

第11表 伊福貴における一本釣によるマダイの漁獲量（昭和51年度）

年 月	漁 獲 量
昭和5011 (1975) ₁₂	2,069(kg) 2,623
昭和51 1 (1976) ₂	2,848 844
	3 8,497
	4 9,406
	5 3,866
計	30,153

（伊福貴漁協調査表による）

とよばれたりもする。漁獲されたタイは、以前は仲買人によって長崎、佐世保方面の市場へ出荷されていた。しかし、昭和51年からは、長崎県漁連の運搬船が魚を回収にくるというシステムがとりいれられている。

さて、タイ一本釣は最近好調であることから、昭和51年には、伊福貴で2名の中学新卒者が漁業に着業した。また、島外で就職していた人が、Uターンしてきて、漁業に着業することもあり始められている。しかし、一方で、最近、エサとして使用されるキビナゴが杣島が漁業権

を有する海域において少なくなっていることが、釣漁業者にとって大きな問題となってきた。

3. ハマチ養殖

ハマチ養殖が杵島に導入されたのは、昭和50年（1975）である。養殖場は、昭和52年（1977）現在、本窯に2ヶ所、伊福貴に1ヶ所、計3ヶ所ある。これらの経営者、飼育尾数などについて示したものが第12表である。

第12表 杵島のハマチ養殖漁場（昭和52年（1977））

	漁 場	経 営 者	養 殖 尾 数	養殖の形式
本 窯	首 ノ 浦 (ニンバン)	奈良尾の 丸野漁業	15万尾	沈 下 式 (丸イケス)
	竹 ノ 浦	奈良尾の 丸サ漁業	10万尾	沈 下 式 (丸イケス)
伊 福 貴	毛 吹	伊 福 貴 の 川瀬利雄氏	5万尾	イ カ ダ 式

稚魚（モジャコ）は五島近海で採捕される。エサとしては、奈留島の小型巾着網によって漁獲された生イワシ、奈良尾の遠洋まき網によって漁獲された冷凍イワシ、北海道産のホッケ、スケソウダラなどが使用されている。

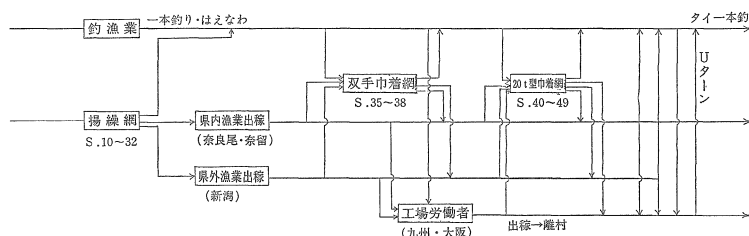
杵島の周辺海域は、潮流が速いため養殖ハマチの形が天然ものに近くなり、さらに肉質も良好となる。しかも海域は汚染される心配がないので、養殖には最適である。しかしながら、養殖業は、釣漁業と競合しなければならないという欠点がある。前述したように、タイ一本釣では、エサ用のキビナゴをとるための漁場を確保することが、漁業を維持してゆくうえで必須の条件である。すなわち、養殖場を拡大させることは、一方ではキビナゴ漁場を縮小させることにつながるのである。したがって、今日、一本釣漁業が杵島における漁業の主体をなしていることを考えると、養殖業が今後一層発展することは、あまり期待できない。

VII む す び

以上、揚繰網時期を中心として、杣島における漁業の変化を明らかにした。以下では、その変化過程を整理することによって、むすびにかきたい。

杣島における漁業の変化過程は、次のようにまとめることができる。

- ① 杣島では、揚繰網導入以前から、網漁業が漁業の中心であった。その頃から、漁獲対象は、イワシという特定魚種に向けられていた。しかし、当時は、労働手段すなわち漁船や漁具などが未発達な段階にあった。したがって、特定魚種の量的減少は顕在化せず、漁業種類自体には大きな変化がみられなかったと考えられる。
- ② 揚繰網という発達した漁法および過度ともいえる揚繰網漁船の集中は、特定漁場における特定の漁獲対象魚種の量的減少を、短期間のうちにひきおこす結果となった。
- ③ 揚繰網衰退の原因としては、②の特定漁場における漁獲対象魚種の量的減少に加えて、海況の変化による漁獲対象魚種の特定漁場からの移動があげられる。
- ④ 杣島の場合、島には資本の蓄積がなかったことから、特定の漁獲対象魚種をおって、新たに遠方漁場へ出漁することが不可能であった。
- ⑤ 特定の漁獲対象魚種の減少に対しては、同じ漁場において漁獲対象を変更することによって、漁業の維持がはかられる場合がある。この場合、漁法が漁獲対象魚種に応じて変化することがある。揚繰網漁業から釣漁業への転化はこれにあたる。
- ⑥ 揚繰網衰退以後、出稼漁夫となった者のほとんどが、県内の揚繰網船に再び乗りこんだ（第13図参照）。これは、特定の漁場において漁業の維持がはかられなかった場合としてとらえられる。
- ⑦ 双手巾着網および20トン型巾着網は、揚繰網による乱獲あるいは海況の変

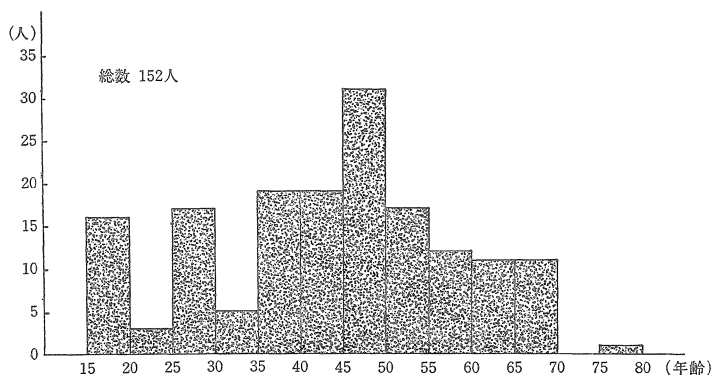


第13図 揚繰網衰退以後の漁業労働者の動き

化によって荒廃した特定漁場において再び特定漁獲対象魚種が量的に増加していることを期待して、操業されたものと考えられる。しかし、結果的には漁場は再生していなかった。

- ⑧ 水産養殖業の導入は、特定漁場において水面のみを利用するという形態で、これまでみられた特定漁場の漁業資源を利用するという形態とは基本的に異なる。

さて、最近、タイ一本釣が好況を呈している。この状態がいつまで維持されるのかということについては、海域の豊度をはじめとした自然生態学的な検討が必要であろう。



第14図 漁業就業者（15歳以上）の年齢別構成（昭和50年（1975））

（福江市役所資料による）

第14図は、昭和50年（1975）の漁業就業者の年齢別構成を示している。これを見ると、現在主体をなすのが、35才から55才までの中、高年層であることがわかる。これは、数年後には、就業者の老齢化がより一層進むことを意味する。しかし、15～20才の層が16名いることは、将来に向けての明るい材料である。今後、何らかの影響で漁業が新しい展開をみせ始めるか、あるいは杵島が、「老後の憩いの場」〔柿本，1975：p. 36〕と化して漁業さえもが衰退してゆくのかは、これら若年就業者の動向にかかっているといえよう。

〈付記〉

本稿作成にあたって御指導いただきました関西学院大学の大島襄二先生、八木康幸先生、ならびに現地調査においてお世話になった杵島の皆様に心からお礼申し上げます。

注

- (1) こうした研究は、柿本典昭の一連の研究〔柿本，1975〕、新宅勇の山口県沿岸漁村の研究〔新宅，1968〕などをはじめ、枚挙にいとまがない。
- (2) たとえば竹田旦は、「長崎県福江市樺島の本窯郷竹之浦・越首・首の浦・芦ノ浦、伊福貴郷野崎・長刀・毛吹・永田の各部落は、俗にヒラキとかイツキなどとよばれる隠れ切支丹、彼らみずからいうところの『帳内』の純農村である。」〔竹田，1970：p. 183〕とのべる（上点筆者）。
- (3) 本窯漁協は昭和24年（1949）11月、伊福貴漁協は同年10月に設立されている。
- (4) 本窯漁港は、昭和28年（1953）2月12日に第一種漁港に指定された。
- (5) 以前は本窯町、伊福貴町にそれぞれ小、中学校があったが、生徒数の減少によって廃校となり、両町界にあたる首ノ浦に両町統合の福江市立杵島中学校が昭和40年（1965）に、福江市立杵島小学校が昭和49年（1974）に新設された。
- (6) 伊福貴漁港は、昭和26年（1951）9月7日に第一種漁港に指定された。
- (7) 杵島は、平家の落人桑原甚五左衛門らによって開かれたと伝えられている。
- (8) 鷹ノ巣崎には海賊の砦があったと言い伝えられている。
- (9) いわゆる五島敷とよばれる定置網のことであると考えられる。
- (10) 新屋は、その後3代つづき、四ツ張り網、縫切網の網元としても栄えた。
- (11) 当時の網は植物性繊維によってつくられていたので、使用後には腐敗を防止するために必ず網干しがなされた。
- (12) ここでいう遠隔地とは、小松昌平によると新潟県であると考えられる〔小松，1959：p. 19〕。

参 考 文 献

藤岡謙二郎・浮田典良（編）

1975 『離島診断』 地人書房。

柿本 典昭

1975 『漁村の地域的研究』 大明堂。

小松 昌幸

1959 「樺島伊福貴地区の社会の実態調査」長崎大学離島総合学術調査団（編）『五島列島総合学術調査報告書』（一） pp. 17-39。

九州水産春秋社（編）

1950 『長崎水産名鑑』昭和25年版 九州水産春秋社。

1952 『長崎水産名鑑』昭和27年版 九州水産春秋社。

松野尾吉五郎

1913 『長崎縣南松浦郡郷土地誌』全 大賀文具店。

宮本常一

1952 「五島列島の産業と社会の歴史的発展」山階芳正（編）『五島列島～九十九島～平戸島学術調査書 附男女群島（西海国立公園候補地）』総論 長崎県 pp. 87-132。

長崎時報社（編）

1950 『五島地区要覧』長崎時報社。

長崎県（編）

1973 『長崎県史』藩政編 吉川弘文館。

長崎県商工水産部（編）

1953 『長崎県商工水産要覧』昭和28年版 九州時報社。

中楯興

1964 「離島の水産業」『九州大学産業労働研究所報』No. 33. pp. 46-78。

大野盛雄

1960 「日本漁業の地域的側面」『地理』Vol. 5. No. 5. pp. 26-31。

新宅勇

1968 『沿岸漁業の地理学的研究』地人書房。

竹田旦

1966 「長崎県南松浦郡樺島」日本民俗学会（編）『離島生活の研究』集英社 pp. 695-768。

1970 『「家」をめぐる民俗研究』弘文堂。

藪内芳彦

1957 「漁村の地理学的研究方法に関する1提案」『地理学評論』Vol. 30. No. 5. pp. 1-20。

1958 『漁村の生態』古今書院。

山階芳正

1952 「地域の概観」山階芳正（編）『五島列島～九十九島～平戸島学術調査書 附男女群島（西海国立公園候補地）』総論 長崎県 pp. 1-86。

—大学院博士課程後期課程—